

1

問題のページへ

- (1)  $g(x) = xe^x - me^x + m$  とおくと、 $g'(x) = e^x + xe^x - me^x = (x+1-m)e^x$   
 $m-2$  より、 $m-1-1$  となるので、 $g(x)$  の増減は下表のようになる。

よって、 $g(x) = 0$  は  $x > 0$  でただ 1 つの実

数解をもつ。

また、 $g(m-1) < g(0) = 0$

$$g(m) = me^m - me^m + m = m > 0$$

以上より、 $g(x) = 0$  の解  $x = c$  は  $m-1 < c < m$  の範囲にある。

$x$	0	...	$m-1$	...	
$g'(x)$		-	0	+	
$g(x)$	0	↘		↗	

- (2)  $f(x) = \frac{e^x - 1}{x^m}$  を微分して、

$$\begin{aligned} f'(x) &= \frac{e^x x^m - (e^x - 1)mx^{m-1}}{x^{2m}} \\ &= \frac{xe^x - me^x + m}{x^{m+1}} = \frac{g(x)}{x^{m+1}} \end{aligned}$$

$x$	0	...	$c$	...
$f'(x)$		-	0	+
$f(x)$		↘		↗

よって、 $f(x)$  は  $x = c$  で極小かつ最小となる。

- (3) (2)より、 $a_m = \frac{e^c - 1}{c^m}$  ( $1 < m-1 < c < m$ )

すると、 $\log a_m = \log(e^c - 1) - m \log c < \log(e^m - 1) - m \log(m-1)$

$$\log(e^m - 1) = \log e^m \left(1 - \frac{1}{e^m}\right) = m + \log\left(1 - \frac{1}{e^m}\right)$$

$$m \log(m-1) = m \log m \left(1 - \frac{1}{m}\right) = m \log m + m \log\left(1 - \frac{1}{m}\right)$$

よって、 $\frac{\log a_m}{m \log m} < \frac{1}{\log m} + \frac{\log\left(1 - \frac{1}{e^m}\right)}{m \log m} - 1 - \frac{\log\left(1 - \frac{1}{m}\right)}{\log m} \rightarrow -1$  ( $m \rightarrow \infty$ )

また、 $\log a_m = \log(e^c - 1) - m \log c > \log(e^{m-1} - 1) - m \log m$

$$\log(e^{m-1} - 1) = \log e^{m-1} \left(1 - \frac{1}{e^{m-1}}\right) = m-1 + \log\left(1 - \frac{1}{e^{m-1}}\right)$$

よって、 $\frac{\log a_m}{m \log m} > \frac{1}{\log m} - \frac{1}{m \log m} + \frac{\log\left(1 - \frac{1}{e^{m-1}}\right)}{m \log m} - 1 \rightarrow -1$  ( $m \rightarrow \infty$ )

以上より、 $\lim_{m \rightarrow \infty} \frac{\log a_m}{m \log m} = -1$

### [ 解 説 ]

(3)の極限值は、大雑把に考えると-1になることはつかめますが、はさみうちの原理を使ってきちんと求めようとすると、時間がかかってしまいます。

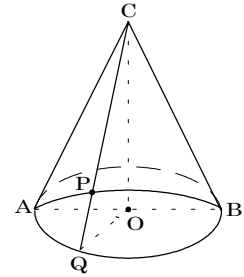
2

問題のページへ

(1) 母線 AC の長さは  $\sqrt{1+3} = 2$  となるので、側面の展開図の中心角を  $\varphi$  とすると、

$$2\pi \cdot 1 = 2\pi \cdot 2 \cdot \frac{\varphi}{360^\circ} \text{ より, } \varphi = 180^\circ$$

線分 AB は底面の直径なので、 $\angle ACB = 90^\circ$   
 よって、 $l$  の長さは展開図で  $AB = 2\sqrt{2}$  となる。



(2) 弧 AQ の長さは、底面では  $2\pi \cdot 1 \cdot \frac{\theta}{360^\circ}$  であるが、側面の

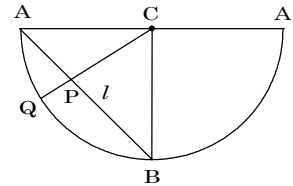
展開図では  $2\pi \cdot 2 \cdot \frac{\angle ACQ}{360^\circ}$  と表せるので、 $\angle ACQ = \frac{\theta}{2}$

APC に正弦定理を適用すると、 $\angle CAP = 45^\circ$  から、

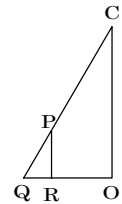
$$\frac{CP}{\sin 45^\circ} = \frac{2}{\sin\left(135^\circ - \frac{\theta}{2}\right)}$$

$$CP = \frac{2 \sin 45^\circ}{\sin\left(135^\circ - \frac{\theta}{2}\right)} = \frac{\sqrt{2}}{\frac{\sqrt{2}}{2} \cos \frac{\theta}{2} + \frac{\sqrt{2}}{2} \sin \frac{\theta}{2}}$$

$$\text{よって, } CP^2 = \frac{2}{\frac{1}{2} \left(\cos \frac{\theta}{2} + \sin \frac{\theta}{2}\right)^2} = \frac{4}{1 + 2 \cos \frac{\theta}{2} \sin \frac{\theta}{2}} = \frac{4}{1 + \sin \theta}$$



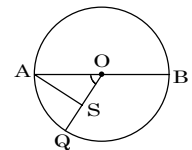
(3) COQ について考えると、 $\frac{OR}{OQ} = \frac{CP}{CQ}$  から、



$$OR = \frac{1}{2} \sqrt{\frac{4}{1 + \sin \theta}} = \frac{1}{\sqrt{1 + \sin \theta}} \text{ より, } OR^2 = \frac{1}{1 + \sin \theta}$$

次に底面について、 $OS = OA \cos \theta = \cos \theta$  より  $OS^2 = \cos^2 \theta$

$$\text{よって, } \frac{OS^2}{OR^2} = \cos^2 \theta (1 + \sin \theta) = (1 - \sin^2 \theta)(1 + \sin \theta)$$



$\sin \theta = t$  とおくと、 $0^\circ < \theta < 90^\circ$  より  $0 < t < 1$

このとき、 $f(t) = (1 - t^2)(1 + t)$  とおくと、

$$f'(t) = -2t(1 + t) + (1 - t^2)$$

$$= -(3t - 1)(t + 1)$$

$f(t)$  は  $t = \frac{1}{3}$  のとき最大値  $\frac{32}{27}$  をとる。すなわち  $\frac{OS^2}{OR^2}$  の最大値は  $\frac{32}{27}$  である。

$t$	0	...	$\frac{1}{3}$	...	1
$f'(t)$		+	0	-	
$f(t)$		↗	$\frac{32}{27}$	↘	

[ 解説 ]

断面図や展開図を書かないと、位置関係がとらえきれない問題です。

3

問題のページへ

(1) 条件より,  $\int_0^{2\pi} \left\{ y \left( x \cos \theta + \frac{1}{2} x^2 \right) - \left( x \cos \theta + \frac{1}{2} x^2 \right)^2 \right\} \cos \theta d\theta = 2k\pi \dots\dots\dots$

まず,  $\left\{ y \left( x \cos \theta + \frac{1}{2} x^2 \right) - \left( x \cos \theta + \frac{1}{2} x^2 \right)^2 \right\} \cos \theta$   
 $= \left( yx \cos \theta + \frac{1}{2} x^2 y - x^2 \cos^2 \theta - x^3 \cos \theta - \frac{1}{4} x^4 \right) \cos \theta$   
 $= -x^2 \cos^3 \theta + (yx - x^3) \cos^2 \theta + \left( \frac{1}{2} x^2 y - \frac{1}{4} x^4 \right) \cos \theta$

ここで,  $\int_0^{2\pi} \cos^3 \theta d\theta = \int_0^{2\pi} \cos \theta d\theta = 0$ ,  $\int_0^{2\pi} \cos^2 \theta d\theta = \int_0^{2\pi} \frac{1 + \cos 2\theta}{2} d\theta = \pi$  を

用いて 変形すると,  $(xy - x^3)\pi = 2k\pi$

よって,  $xy - x^3 = 2k \dots\dots\dots$

(2) 曲線 と直線  $y = a$  との共有点が 1 個なので, に  $y = a$  を代入して,

$xa - x^3 = 2k$ ,  $x^3 - ax + 2k = 0 \dots\dots\dots$

が実数解を 1 つだけでもつ条件を求める。

ここで, の左辺を  $f(x) = x^3 - ax + 2k$  とおくと,  $f'(x) = 3x^2 - a$

(i)  $a \leq 0$  のとき

$f'(x) \geq 0$  より  $f(x)$  が単調増加となるので, 0 以上の任意の  $k$  で は実数解を 1 つだけでもつ。

(ii)  $a > 0$  のとき

$f'(x) = 3 \left( x + \sqrt{\frac{a}{3}} \right) \left( x - \sqrt{\frac{a}{3}} \right)$  となり,

$f \left( -\sqrt{\frac{a}{3}} \right) = \frac{2}{3} a \sqrt{\frac{a}{3}} + 2k$

$f \left( \sqrt{\frac{a}{3}} \right) = -\frac{2}{3} a \sqrt{\frac{a}{3}} + 2k$

$x$	...	$-\sqrt{\frac{a}{3}}$	...	$\sqrt{\frac{a}{3}}$	...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗		↘		↗

$k \geq 0$  より,  $f \left( -\sqrt{\frac{a}{3}} \right) > 0$  なので, が実数解を 1 つだけでもつ条件は,

$f \left( \sqrt{\frac{a}{3}} \right) = -\frac{2}{3} a \sqrt{\frac{a}{3}} + 2k > 0$

まとめると  $a^3 < 27k^2$  より,  $0 < a < 3\sqrt[3]{k^2}$

(i)(ii)より, 求める  $a$  の範囲は  $k > 0$  のとき  $a < 3\sqrt[3]{k^2}$ ,  $k = 0$  のとき  $a \geq 0$  となる。

[ 解 説 ]

(1)は, 一見パスしたくなる問題ですが, 三角関数の周期性を使えば, 積分計算は簡単です。それに対して(2)では, 論理の詰めに注意が必要でした。

4A

問題のページへ

(1)  $f(a) = a$  より,  $1 - a^2 = a$ ,  $a^2 + a - 1 = 0$

$$a > 0 \text{ より, } a = \frac{-1 + \sqrt{5}}{2}$$

(2)  $|f(x) - f(a)| = |1 - x^2 - (1 - a^2)| = |-(x+a)(x-a)| = |x+a||x-a|$

ここで条件より,  $|x+a| \left| \frac{1}{2} + \frac{-1 + \sqrt{5}}{2} \right| = \frac{\sqrt{5}}{2}$

よって,  $|f(x) - f(a)| = \frac{\sqrt{5}}{2}|x-a|$

(3)  $x_{n+1} = f(x_n)$ ,  $a = f(a)$  なので,  $x_n = \frac{1}{2}$  のとき(2)より,

$$|x_{n+1} - a| = |f(x) - f(a)| = \frac{\sqrt{5}}{2}|x - a|$$

よって,  $|x_n - a| = |x_1 - a| \left( \frac{\sqrt{5}}{2} \right)^{n-1}$

(i)  $x_1 - a \neq 0$  のとき

$n \rightarrow \infty$  のとき  $|x_n - a| \rightarrow \infty$  となるので, すべての  $n$  に対しては  $|x_n - a| < 1$  が成立しない。

(ii)  $x_1 - a = 0$  のとき

$a = f(a)$  なので, すべての  $n$  に対して  $x_n = a$  となる。

(1)より,  $\frac{1}{2} < a < 1$  なので, すべての  $n$  に対して  $|x_n - a| < 1$  が成り立つ。

(i)(ii)より,  $x_1 = a$  の場合のみ題意が成立する。

## [ 解 説 ]

(2)の不等式は, (3)で定義された数列の発散条件に対応することがわかります。これを(3)の題意に結びつけることがポイントです。

4B

問題のページへ

$$\text{まず, } \left(\frac{a+2b}{3}\right)^2 - (\sqrt{ab})^2 = \frac{4b^2 - 5ab + a^2}{4} = \frac{(4b-a)(b-a)}{4}$$

$$0 < a < b \text{ なので, } \left(\frac{a+2b}{3}\right)^2 - (\sqrt{ab})^2 > 0$$

$$\text{よって, } \frac{a+2b}{3} > \sqrt{ab} \dots\dots\dots$$

$$\begin{aligned} \text{また, } \left(\sqrt[3]{\frac{b(a^2+ab+b^2)}{3}}\right)^3 - \left(\frac{a+2b}{3}\right)^3 &= \frac{b(a^2+ab+b^2)}{3} - \frac{(a+2b)^3}{27} \\ &= \frac{b^3 - 3ab^2 + 3a^2b - a^3}{27} \\ &= \frac{(b-a)^3}{27} \end{aligned}$$

$$0 < a < b \text{ なので, } \left(\sqrt[3]{\frac{b(a^2+ab+b^2)}{3}}\right)^3 - \left(\frac{a+2b}{3}\right)^3 > 0$$

$$\text{よって, } \sqrt[3]{\frac{b(a^2+ab+b^2)}{3}} > \frac{a+2b}{3} \dots\dots\dots$$

$$\text{より, } \sqrt[3]{\frac{b(a^2+ab+b^2)}{3}} > \frac{a+2b}{3} > \sqrt{ab}$$

## [ 解 説 ]

解に必要なスペースからもわかるように、3 題の選択題のなかでは、他の 2 題と比べてかなり易くなっています。なお、上の解には書いていませんが、まず  $a=1$ 、 $b=4$  として各式の値を計算し、大小関係を予測して解いています。

4C

問題のページへ

- (1)  $\overrightarrow{OA} = (a_1, a_2)$  より, 直線  $OA : a_2x - a_1y = 0$  と表せるので,  $B = |a_2p_1 - a_1p_2|$ ,  
 $C = \sqrt{a_1^2 + a_2^2}$  とすると, 点  $P$  と直線  $OA$  の距離  $D$  は  $D = \frac{B}{C}$  となる。

```

10 DIM A(2), P(2)
20 INPUT A(1), A(2)
30 INPUT P(1), P(2)
40 B = ABS(A(2) * P(1) - A(1) * P(2))
50 C = SQR(A(1)^2 + A(2)^2)
60 D = B / C : PRINT D
70 END

```

- (2)  $\overrightarrow{BA} = (a_1 - b_1, a_2 - b_2)$  より直線  $AB : (a_2 - b_2)(x - a_1) - (a_1 - b_1)(y - a_2) = 0$   
 $C = \sqrt{(a_1 - b_1)^2 + (a_2 - b_2)^2}$ ,  $D = (a_2 - b_2)(p_1 - a_1) - (a_1 - b_1)(p_2 - a_2)$ ,  
 $E = (a_2 - b_2)(q_1 - a_1) - (a_1 - b_1)(q_2 - a_2)$  とおくと, 点  $P$ , 点  $Q$  と直線  $AB$  の距離  
は, それぞれ  $\frac{|D|}{C}$ ,  $\frac{|E|}{C}$  なので,  $\frac{|D|}{C} < 0.00001$  または  $\frac{|E|}{C} < 0.00001$  のときは, 0  
を表示する。この場合以外については,  $D \cdot E > 0$  のときは  $P$  と  $Q$  が直線  $AB$  の同  
じ側にあるので 1 を表示, そうでなければ -1 を表示する。

```

10 DIM A(2), B(2), P(2), Q(2)
20 EPS = 0.00001
30 INPUT A(1), A(2)
40 INPUT B(1), B(2)
50 INPUT P(1), P(2)
60 INPUT Q(1), Q(2)
70 C = SQR((A(1) - B(1))^2 + (A(2) - B(2))^2)
80 D = (A(2) - B(2)) * (P(1) - A(1)) - (A(1) - B(1)) * (P(2) - A(2))
90 E = (A(2) - B(2)) * (Q(1) - A(1)) - (A(1) - B(1)) * (Q(2) - A(2))
100 IF ABS(D) / C < EPS THEN PRINT "0" : GOTO 130
110 IF ABS(E) / C < EPS THEN PRINT "0" : GOTO 130
120 IF D * E > 0 THEN PRINT "1" ELSE PRINT "-1"
130 END

```

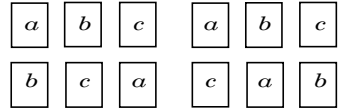
## [ 解説 ]

(2)ではさまざまなプログラムが考えられ, 採点がたいへんでしょう。

5D

問題のページへ

- (1) 5枚のカードの並べ方は $5!$ 通りある。5枚のカードで2枚だけ数字が一致するのは、そのカードの選び方が ${}_5C_2$ 通りで、残りの3枚が一致しない場合、その数字を $a, b, c$ とすると、右図のように2通りある。



$$\text{よって、} P(X=2) = \frac{{}_5C_2 \times 2}{5!} = \frac{1}{6}$$

- (2)  $a_k P(X=k)$  は1を含めて $k$ 枚の数字が一致する確率を表し、その確率を $k=1$ の場合から $k=n$ の場合まで加えると、数字1のカードが一致する確率 $p$ となる。また、 $P(X=k)$ は $k$ 枚の数字が一致する確率である。

したがって、 $a_k$ は $k$ 枚の数字が一致する条件のもとで、その $k$ 枚の中の1枚が1である確率を意味する。すると、 $k$ 枚のカードの数字の選び方が ${}_n C_k$ 通り、1以外の数字の選び方が ${}_{n-1} C_{k-1}$ 通りとなるので、

$$a_k = \frac{{}_{n-1} C_{k-1}}{{}_n C_k} = \frac{(n-1)!}{\frac{(k-1)!(n-k)!}{n!}} = \frac{k}{k!(n-k)!}$$

- (3)  $E(X) = \sum_{k=1}^n kP(X=k)$  であり、(2)より $k = na_k$ なので、

$$E(X) = \sum_{k=1}^n na_k P(X=k) = np$$

ここで、数字1が一致する確率は、 $p = \frac{1}{n}$ より、

$$E(X) = n \cdot \frac{1}{n} = 1$$

### [ 解 説 ]

(2)が(3)のうまい誘導となっていて、おもしろい問題です。なお、解のポイントとなる(2)では、 $a_k$ の意味がすぐにはつかめませんでしたので、こんなときはいつものように $k=1, 2, 3, \dots$ と具体的に考えていきました。そうすると思考がまとまりました。

5E

問題のページへ

(1)  $x^2 + 2kx + 3k = 0 \dots\dots$  の2つの解が  $\alpha, \beta$  ( $\alpha \neq \beta$ ) なので,

$$\alpha + \beta = -2k, \quad \alpha\beta = 3k \dots\dots\dots$$

また, の判別式  $D/4 = k^2 - 3k = k(k-3)$ (i)  $D/4 > 0$  ( $k < 0, 3 < k$ ) のとき

$$|\alpha - i|^2 + |\beta - i|^2 = (\alpha^2 + 1) + (\beta^2 + 1) = (\alpha + \beta)^2 - 2\alpha\beta + 2$$

$$\text{より, } |\alpha - i|^2 + |\beta - i|^2 = 4k^2 - 6k + 2$$

(ii)  $D/4 < 0$  ( $0 < k < 3$ ) のときの解は  $\alpha, \bar{\alpha}$  となるので, は  $\alpha + \bar{\alpha} = -2k, \alpha\bar{\alpha} = 3k \dots\dots\dots$  ' ,

$$|\alpha - i|^2 + |\beta - i|^2 = (\alpha - i)(\bar{\alpha} - \bar{i}) + (\bar{\alpha} - i)(\alpha - \bar{i})$$

$$= (\alpha - i)(\bar{\alpha} + i) + (\bar{\alpha} - i)(\alpha + i)$$

$$= 2\alpha\bar{\alpha} + 2$$

$$\text{' より, } |\alpha - i|^2 + |\beta - i|^2 = 6k + 2$$

(2)  $\angle APB = 90^\circ$  のとき, 三平方の定理より,

$$|\alpha - i|^2 + |\beta - i|^2 = |\alpha - \beta|^2 \dots\dots\dots$$

(i)  $D/4 > 0$  ( $k < 0, 3 < k$ ) のとき

$$|\alpha - \beta|^2 = (\alpha - \beta)^2 = (\alpha + \beta)^2 - 4\alpha\beta = 4k^2 - 12k$$

$$\text{より, } 4k^2 - 6k + 2 = 4k^2 - 12k$$

$$k = -\frac{1}{3} \quad (\text{この値は } k < 0, 3 < k \text{ を満たす})$$

(ii)  $D/4 < 0$  ( $0 < k < 3$ ) のとき

$$|\alpha - \bar{\alpha}|^2 = (\alpha - \bar{\alpha})(\bar{\alpha} - \alpha) = 2\alpha\bar{\alpha} - \{(\alpha + \bar{\alpha})^2 - 2\alpha\bar{\alpha}\} = 12k - 4k^2$$

$$\text{より, } 6k + 2 = 12k - 4k^2, \quad 2k^2 - 3k + 1 = 0$$

$$k = 1, \quad \frac{1}{2} \quad (\text{この値は } 0 < k < 3 \text{ を満たす})$$

(i)(ii)より,  $k = -\frac{1}{3}, \frac{1}{2}, 1$ 

## [ 解 説 ]

複素数に関する頻出問題の一つです。要点は, 2 次方程式 が実数解をもつときと虚数解をもつときとを場合分けすることです。

5F

問題のページへ

$$(1) \text{ 条件より, } |\vec{a}| = |\vec{b}| = |\vec{c}| = 1, \vec{a} \cdot \vec{b} = \vec{b} \cdot \vec{c} = -\frac{1}{2}, \vec{a} \cdot \vec{c} = 0$$

$$\vec{a} \cdot \vec{d} = 1 \text{ より, } \vec{a} \cdot \vec{d} = \vec{a} \cdot (x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c}) = 1 \text{ なので, } x - \frac{1}{2}y = 1 \dots\dots\dots$$

$$\vec{b} \cdot \vec{d} = 0 \text{ より, } \vec{b} \cdot \vec{d} = \vec{b} \cdot (x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c}) = 0 \text{ なので, } -\frac{1}{2}x + y - \frac{1}{2}z = 0 \dots\dots\dots$$

$$\vec{c} \cdot \vec{d} = 0 \text{ より, } \vec{c} \cdot \vec{d} = \vec{c} \cdot (x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c}) = 0 \text{ なので, } -\frac{1}{2}y + z = 0 \dots\dots\dots$$

$$\text{より, } (x, y, z) = \left(\frac{3}{2}, 1, \frac{1}{2}\right)$$

$$\text{また, } \vec{f} = u\vec{a} + v\vec{b} + w\vec{c} \text{ において同様にすると, } \vec{a} \cdot \vec{f} = 0 \text{ より } u - \frac{1}{2}v = 0,$$

$$\vec{b} \cdot \vec{f} = 0 \text{ より } -\frac{1}{2}u + v - \frac{1}{2}w = 0, \vec{c} \cdot \vec{f} = 1 \text{ より } -\frac{1}{2}v + w = 1$$

$$\text{よって, } (u, v, w) = \left(\frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}\right) \text{ から, } \vec{f} = \frac{1}{2}\vec{a} + \vec{b} + \frac{3}{2}\vec{c}$$

$$(2) (1) \text{ より, } |\vec{d}|^2 = \left|\frac{3}{2}\vec{a} + \vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c}\right|^2 = \frac{9}{4} + 1 + \frac{1}{4} + 2 \cdot \frac{3}{2} \cdot \left(-\frac{1}{2}\right) + 2 \cdot \frac{1}{2} \cdot \left(-\frac{1}{2}\right) = \frac{3}{2}$$

$$|\vec{f}|^2 = \left|\frac{1}{2}\vec{a} + \vec{b} + \frac{3}{2}\vec{c}\right|^2 = \frac{1}{4} + 1 + \frac{9}{4} + 2 \cdot \frac{1}{2} \cdot \left(-\frac{1}{2}\right) + 2 \cdot \frac{3}{2} \cdot \left(-\frac{1}{2}\right) = \frac{3}{2}$$

$$\text{よって, } |\vec{d}| = |\vec{f}| = \sqrt{\frac{3}{2}} = \frac{\sqrt{6}}{2}$$

$$\text{また, } \vec{d} - \vec{f} = \frac{3}{2}\vec{a} + \vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c} - \frac{1}{2}\vec{a} - \vec{b} - \frac{3}{2}\vec{c} = \vec{a} - \vec{c}$$

$$|\vec{d} - \vec{f}|^2 = |\vec{a} - \vec{c}|^2 = 1 - 2 \cdot 0 + 1 = 2 \text{ なので, } |\vec{d} - \vec{f}| = \sqrt{2}$$

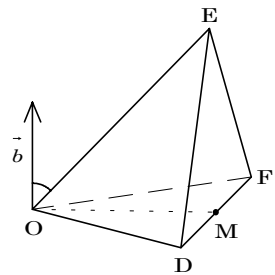
$$(3) \text{ ODF は } OD = OF = \frac{\sqrt{6}}{2} \text{ の二等辺三角形より, 底辺 } DF = \sqrt{2} \text{ の中点を } M \text{ とおくと, } OM = \sqrt{\left(\frac{\sqrt{6}}{2}\right)^2 - \left(\frac{\sqrt{2}}{2}\right)^2} = 1 \text{ となる.}$$

$$\text{よって, } ODF = \frac{1}{2} \cdot \sqrt{2} \cdot 1 = \frac{\sqrt{2}}{2}$$

$$(4) \vec{b} \cdot \vec{d} = 0, \vec{b} \cdot \vec{f} = 0 \text{ より, } \vec{b} \text{ は平面 ODF に垂直である.}$$

ここで,  $\vec{b}$  と  $\vec{e}$  のなす角を  $\theta$  とおくと,  $\vec{b} \cdot \vec{e} = 1, |\vec{b}| = 1$  から,  $|\vec{e}| \cos \theta = 1$  となる.

これは, ODF を底面とするとき, 四面体 ODEF の高さが 1 であることを表すので, 体積は  $\frac{1}{3} \cdot \frac{\sqrt{2}}{2} \cdot 1 = \frac{\sqrt{2}}{6}$  となる.



## [ 解説 ]

(4)では,  $\vec{b}$  が平面 ODF の法線ベクトルであるのに注目して解きました。